平成１７年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

（整理番号） ２１３ ※記入不要	提案機関名	湘南家畜保健衛生所

要望問題

バイオベット（おが屑等ふん尿混合発酵床）、放し飼い飼養用地における消毒と効果判定

要望問題の内容　【　背景、内容、対象地域及び規模（面積、数量等）】

１背景

より自然な飼養形態による畜産物の供給に対する社会的要求は、決して少ないとはいえない。県内においてもバイオベットや放し飼い飼養による豚や鶏の飼養者があり、一般的な飼養形態の家畜飼養者と両極をなしている。一方で、高病原性鳥インフルエンザの発生等、人と動物の共通感染症問題で病原体による汚染防止のため、畜体のみならず、飼養場所の消毒の必要性も高まっている。このような中、バイオベットや放し飼い飼養地に対する消毒は、一般的な洗浄・乾燥・薬剤散布の手法が使えず、また、その効果の判定方法もむずかしい。

２内容

(１)　効果的な消毒方法を検討する

(２)　その効果を判定する手法を確立する

３対象地域及び規模

研究所内において基礎研究を実施し、その後、実際の家畜飼養者へ普及をはかる。

解決希望年限	①１年以内　②２～３年以内　③４～５年以内　④５～１０年以内 出来るだけ早い普及を希望するが、４～５年はかかってしまうと思う
研究対応区分	①研究所対応　②委託研究　③共同研究　④その他
対応を希望する研究機関名	①農業総合研究所（ ②根府川試験場　③三浦試験場　④津久井試験場 ） ⑤畜産研究所　⑥水産総合研究所（ ⑦内水面試験場　⑧相模湾試験場 ） ⑨自然環境保全センター

※　ここから下の欄は、回答者が記入してください。

回答機関名	畜産研究所
部　　署：畜産工学部	
対応区分	①実施 ②実施中 ③継続検討 ④実施済 ⑤調査指導対応 ⑥現地対応 ⑦実施不可
試験研究課題名　（①、②、④の場合）	

対応の内容等

バイオベットや放し飼いによる飼養形態は、自然農法的な発想や除糞作業の省力化、建設コストの低減などの利点から一部の生産者に取り入れられています。その反面、バイオベット方式で飼養すると豚回虫卵の検出率が高くなるとの報告もあり、発酵が不十分であったり、飼養管理が不適切であると寄生虫や細菌などの温床となることが考えられます。

しかし、ご提案にもあるように、このような飼養形態では、家畜が飼養されたままの状態で飼養場所を消毒する事は難しいと思います。

一般的には、①おがくずの発酵状態を常に良好な状態に維持するために、定期的に切り返しを行う。
②汚れがひどい部分は頻繁に取り除き、新しいおがくずを入れる。
③病原体を畜舎内に持ち込まない。
④定期的に寄生虫検査や細菌検査検査を実施する。
⑤オールアウト時の適正な消毒を行う。等が上げられます。

上記の方法により現地指導で対応して下さい。

解決予定年限	①１年以内　②２～３年以内　③４～５年以内　④５～１０年以内
備　考	